

〔資料〕

千葉大学看護学部家族看護学(寄附講座)における活動とその意義

東海大学健康科学部看護学科助教授

鈴木和子

家族看護研究所

渡辺裕子

1. はじめに

平成4年4月に千葉大学看護学部家族看護学講座という寄附講座ができたのは、ついこの前のような気がするが、早くも5年間の経過し、平成9年3月末、講座は終了した。講座の開設半年後に東京大学にも家族看護学講座ができ、さらにその2年後の平成6年10月に日本家族看護学会が設立され、家族看護学の礎が急速に築かれて行った。

このような家族看護学の発展の経緯に寄附講座の存在が何らかの形で寄与したといえるとしたら、講座を担当した者として、この上ない喜びである。そこで、一度、5年間の活動の軌跡を辿りながら、家族看護学にとって寄附講座がどのような意義をもたらしたのか振り返ってみる必要があると考え、編集部からの依頼をよい機会であると執筆に応じた。

2. 活動の概要

1) 教育活動

講座の活動は、大学であることから勿論、教育、研究を中心に行われたわけであるが、やはり、寄附講座であるという性格上、多少その重点が一般の講座とは異なっていた。

まず、学部内の教育活動であるが、千葉大学では、すでに20年以上の教育の歴史を有していたので、新たにカリキュラムを変更することは容易ではない。従って、家族看護学は、既存の対象別の講座の

中で家族に関する科目の一部を担当するという形で行われた。とくに地域看護学では、3年生への家族相談援助論を1部担当して、地域における家族看護学の発展過程や課題、援助方法について講義を行った。また、成人看護学でも短時間であったが、ターミナル患者の家族援助という内容で授業を行った。講座では、4年次の後半で行う卒業研究も分担したが、それまでの授業で家族看護学に興味をもった学生が家族に関する課題を選択した。とくに、毎年、がん患者の家族の問題を取り上げる学生がみられ、その他、訪問看護や老人の介護に関する家族の課題を取り上げる学生がみられた。

また、千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センターでは、毎年、30時間の家族看護学概論の講義を担当したが、選択制であるが看護教育養成課程の受講者の殆ど全員が選択し、家族看護学に対する関心の高さを感じさせられた。さらに講座の後半には、他の新設の大学などから家族看護学の講義依頼があり、大学のカリキュラムに家族看護学を位置づけようという機運が高まっていることが実感させられた。

2) 研究活動

寄附講座が開設され、研究活動計画を立てたが、講座制をとっている千葉大学の特色を活かして、対象領域別の各講座(後に大講座制となったので各教育研究分野)とのジョイント研究と講座独自の研究との二本立てで行うこととし、1年に2教育研究分野とのジョイント研究を行うための年次計画を立てた。このジョイント研究のテーマおよび発表先等の

実施状況は、表1に示すとおりである。

このように、各対象領域には、それぞれ家族に関する特有の課題があり、専門領域と家族看護学講座とのジョイント研究により、家族看護学があらゆる領域を網羅する学問領域であることが裏付けられた。

また、講座の研究は、なるべく実践に即した研究を心がけた。主に千葉県内にフィールドを設けて、地域での家庭訪問活動や臨床の現場での家族援助や看護婦へのコンサルテーションなどを行いながら、家族看護の基本を抽出することを研究課題とした。これらの結果をまとめながら、平成7年の秋には、「家族看護学理論と実践」を出版することができた。

3) 地域への貢献

寄付講座では、地域への貢献を重視しているので、研修などの講師依頼には積極的に応じた。とくに訪問看護婦の養成に関しては、千葉県のみではなく全国の管理者講習などにも家族看護学を科目として立てていただけたことは、この学問の認知や普及のためによい機会になったと思う。また、最も寄付講座らしい活動として公開講座への参加があるであろう。まず、2年目に看護学部で行った「高齢社会を支える家族看護」に、5年目には、千葉大学全学での「今日の家・家族を考える」において、家族のケア機能について講義し、講座の最終年の行事として看護専門職向けの公開講座「家族看護の実際」に主要な役割を果たすことができた。

この他、初年度の後半に千葉県の保健婦を対象に

スタートした家族看護研究会は、その後、看護婦を対象にして最後まで行われたが、家族看護を事例を通して根づかせることと同時に、事例から家族看護を発展させるという重要な役割を果たしてくれた。

4) 国際的な活動

家族看護学すなわち Family Nursing は、米国、カナダを中心に発展してきている。そのために、最初の文献検索では、どうしても海外文献をひもとくことが中心になった。また、2年目には、千葉大学看護学部主催の国際シンポジウムを「家族看護学の動向」というテーマで行った。そのときは、シンポジストの選抜から運営、発表のすべてに講座の教員が関わり、そのことで家族看護学の第一人者たちとの人脈を得たばかりではなく、家族看護学研究の最新の情報や発展状況を知る機会を得た。また、それをきっかけにアラバマ大学のデーヴィス教授との国際比較研究がスタートし、その後3年間にわたって行われた。その他、第3回国際家族看護会議やカルガリー大学での研修などにも参加したことは、家族看護学における日本の位置づけを確かめ、方向性を見定めることに役立った。

以上、述べてきた活動状況については、講座終了時に「研究活動報告書」としてまとめてあるので参考にさせていただきたいと思う。

3. 寄附講座の意義

5年間の寄附講座における活動の概要を振り返つ

表1. 学部内ジョイント研究実施状況

年 度	研究テーマ	研究教育分野	発表誌	発表学会
平成4年	小児看護における家族アセスメントの実態と内容の検討	小児看護学	紀要 Vol. 16	日本看護科学学会
	家族を対象とした看護過程における看護婦の認識	基礎看護学	紀要 Vol. 16	日本看護科学
平成5年	第1子出生による家族の適応過程	母性看護学	紀要 Vol. 17	国際看護科学
	家庭介護教室受講者の介護協力意識	地域看護学	紀要 Vol. 17	日本公衆衛生
平成6年	終末期の家族成員を含む家族の変化と家族対処	成人看護学	紀要 Vol. 17	日本看護科学
	精神科看護における家族看護過程の特徴に関する研究	精神看護学	紀要 Vol. 18	日本家族看護学会
平成7年	家族看護学に関する教員の意識と教育の現状	看護教育学	紀要 Vol. 18	日本看護科学
	透析疾患の患者・家族の対処過程に関する研究	老人看護学		
平成8年	小児看護領域の看護婦の家族援助に関する認識	小児看護学		

てみたが、その時期は、わが国の家族にとっても高齢化や少子化が急速に進んだ社会的状況の変動の激しい時代であった。また、講座の3年目の1994年は、国際家族年でもあり、いろいろな催しものが行われ、家族のあり方に対する関心が一段と高まったことは周知の通りである。

1990年頃に千葉銀行が最初に千葉大学に寄附を申し出たときには、その前兆はあったものの、これほど家族の状況が変化し、家族看護のニーズが高まると予測されていたかどうかは分からない。しかし、千葉大学看護学部では、わが国の高齢化社会の到来や在宅ケアの推進等による家族看護の社会的ニーズをいち早く察知し、家族看護学講座を立てることに決定したという。しかも、千葉大学が講座制であったため家族看護学は、どの講座にも共通の領域であることが選択の理由でもあった。すなわち、既存の看護領域に特有の家族の抱える問題とその対応について、それぞれの領域が学問的に深めることができると同時に、全領域に共通の家族看護を明らかにすることができ、一つの新しい学問領域として構築するのに実に好都合であったといえる。

つまり、千葉大学看護学部に看護に対する時代の要請をキャッチする力があつたことと、大学自体の

組織と教員の構成などの条件がマッチし、家族看護学講座を誕生させたのであろう。このことは、家族看護学講座が、歴史の流れの中で必然的に生まれてきたようで、そこには、それを創り出した深い学識が根底にあつたことを今さらのように感じる。

このようにして誕生した寄附講座は、看護界は勿論のこと、一般の人々からも注目を浴びる結果となり、家族看護が時代の要求に対応するものであり、その学問領域を看護学の一領域として位置づけることの必要性の認識を高める効果があつたと確信している。

かくて講座の5年間で多くの人々の期待と協力のもとに無事終了したわけであるが、私たち二人は、今後もさらに家族看護学を追求していく責任を感じている。鈴木は、東海大学において地域看護学の中で家族看護学を学部学生に教えながら、さらに裾野を広げて行こうと考えている。一方、渡辺は、自宅に家族看護研究所を設置し、病院や教育機関との契約を取り付けて、臨床看護婦などに対して、家族看護の教育指導を開始した。勿論、二人とも日本家族看護学会の会員としての活動に引き続き活発に参加し、学会員全員によって、わが国の家族看護学を創るという夢の実現を追いつづけるつもりでいる。